# ウィスキー司祭を表す幾つかの表現
## —旅行記、小説、映画—

鴨 川 啓 信

グレアム・グリーン（Graham Greene）の長編小説『力と栄光』（*The Power and the Glory*, 1940）は、カソリック信仰を主題としており、しばしばこの作家の代表作と目される。また、"*The Power and the Glory* was born of a journey to Mexico in the winter of 1937-8"（vii）と、グリーン自身が全集版の序文で認めているように、カソリック信仰が禁じられた革命後のメキシコを取材旅行している際に、グリーンが見聞した人物、事物や状況が小説の具体的なモデルとなっている。読者はその旅行の様子を、旅行記『掟なき道』（*The Lawless Roads*, 1939）に見ることができる。実際、両者を読み比べてみれば、多くの批評家が指摘しているように、幾人かの登場人物、幾つかのモチーフやエピソードの類似性が見て取れる。例えば、小説冒頭に登場するイギリス人歯科医は、旅行記でのアメリカ人歯科医が元になっているのだろう。両者とも、安価で粗悪な日本製のドリルしか使えないことを嘆いている。そして、小説の主要人物と同じく「ウィスキー司祭」と呼ばれた実在の酔っぱらい司祭のことも、旅行記に記されている。R. H. Millerは、"Scenes, events, and characters are lifted out of *The Lawless Roads* and dropped into *The Power and the Glory*, frequently with little change"（55）と指摘するが、「ほとんど変更なしに」というのは言葉の綾にすぎない。実際には、現実の素材から小説を作る際に様々な変更が加えられている。特に、旅行記を見る限りでは、現実に存在した「ウィスキー司祭」については僅かで断片的な情報しかなく、長編小説の中心人物とするためには大きな追加・変更が不可欠である。まずはその点を考察する。

### 1．小説のウィスキー司祭と旅行記の司祭達

旅行記（と小説全集版の序文）の「ウィスキー司祭」に関する記述は、整理すると以下の通りである。まず、タバスコ州にいた女性信者の話の中に、"There had been one priest over the border in Chiapas" と登場する司祭は、

他の司祭達がカソリック禁止令のためにその地を立ち去った後も付近に留まっていた。しかし彼を匿いきれなくなった住民達に言われて、そこから逃げ出すことになったと語られる（LR 131）。別の人の話ではその司祭は、“he was just what we call a whisky priest” と小説と同じく酔っぱらいであり、ある信者が洗礼を施してもらおうと息子を連れて行ったところ、“the priest was drunk and would insist on naming him Brigitta” と、男の子に女性の名前を付けようとした（LR 141）。このエピソードは、小説にもそのまま登場する（P&G 27）。その最期については、“Afterwards he had disappeared into the mountains on the borders of Chiapas—perhaps he was killed by the Red Shirts, perhaps he had escaped to easier conditions”（P&G viii-ix）と、はっきりしたことは分かっていない。

旅行記の記述と比較すると、小説のウィスキー司祭は、酔っぱらいで司祭としての日課をおろそかにする側面を、実在した司祭から引き継いでいることが分かる。しかし、このような側面は、小説のウィスキー司祭の一部分にすぎない。彼は、その不良司祭的な振る舞いの一方で、“When he was gone it would be as if God in all this space between the sea and the mountains ceased to exist”（P&G 74）という考えから、人々の信仰を守ることを司祭である自分の義務であると捉え、他の神父達が立ち去った後も信仰が禁止された地に留まっていると描かれる。だが、別の場面では、留まったのは傲慢さのためだとも述べられる（P&G 112, 235-6）。この傲慢さの自覚、不良司祭である自分は人々に信仰を示す手本としてはふさわしくないという思い、圧政や窮乏に苦しむ人々に対して役に立つことができないという無力感は、小説を通じて繰り返し示され、希望の見えない世界観と相まって小説全体のトーンを定めている。特に無力感について旅行記にその由来を求めると、タバスコ州で10年間森林や沼地に潜んでいた、ある司祭が残した僅かな手紙に関する記述が見つかる。（この人物を「ウィスキー司祭」と同一視している批評家もいるが、旅行記の記述からは確認できない。）手紙に記されているのは、“an awful sense of impotence—to live in constant danger and yet be able to do so little, it hardly seemed worth the horror” という思いである（LR 121）。これはまさに、絶望的な状況下で何もできずに逃げ回る小説の司祭の心情を言い表している。一方で、カソリック禁止令の取り締まりが緩やかな土地に一時的に逃れて、心身共に疲弊した状態から回復した小説のウィスキー司祭は、その地では教会の代理人として住民から必要とされていることを感じて、迫害以前に持っていた愚かしい権威と自堕落な習慣を取り

戻す。その時に語られるエピソードは、一人頭2ペソで（結局はもっと低い額で）100人もの子供達に洗礼を施すというものだ（P&G 199-200）。これは、旅行記に出てくる別の司祭が同様に貧しい人々から一人頭2ペソのお金を取り、数百人の子供に集団洗礼を行った話（LR 187-8）と重なり合う。

旅行記には、「ウィスキー司祭」以外の神父達に関する情報も示されるが、グリーンが旅行中に直接会った者達のものは別として、多くの場合それらは詳細不明の神父達についての相互に関連もない断片的な話である。そのようなエピソードや性質の幾つかが、小説ではウィスキー司祭のものとなっている。そのことを反映するように、司祭には複数の異なった性質が同居する。飲酒癖があり、酔って私生児を作ってしまうような節制の欠如が見られる一方で、宗教迫害の地に残ったのは自分の傲慢さの表れにすぎず、人々に信仰を示す司祭として自分はふさわしくないと考える厳しい自己意識を持っている。また宗教が人々の窮状に対する根本的な解決策とはならないことを認識しつつ、信仰がもたらす救いの可能性を信じ、自分の務めを投げ出さずに苦しい逃亡生活を続ける。時には矛盾するようにも見える言動をするウィスキー司祭は、一つの単純なイメージに収斂することがない。これは、酔っぱらいの不良司祭という性質以外には示されていない旅行記の「ウィスキー司祭」とは大きく異なっている。言い換えると、小説のウィスキー司祭が現実の「ウィスキー司祭」をもとに作られたというのは、部分的にしか正しくない。その他の司祭達の性質やエピソードも付け加えられ、小説の司祭は様々な異なる側面を示す複合的存在となっている。

このような矛盾をはらんだ複合性は、ウィスキー司祭を単なる不良司祭、あるいは単なる聖人と見なすような、一面的な読み方を否定する。例えば、“Greene creates a saint's life that stresses not personal pride, a greedy hungering after goodness, but rather the signs of grace, a true humanness in the whisky priest in his shabbiness, his alcoholism, his fornication”（Miller 66）というように、ウィスキー司祭を聖人と見なしながらも、その根拠となる美徳は彼の不良司祭的要素にこそ表れていると読まれる。または、“the priest may have arrived at sainthood through the paradoxical virtue of believing he hasn't”（Pendleton 100）というように、聖人的でないと考えるゆえに聖人的という逆説的解釈が行われる。また、この小説について、“many of the events depend for their full effect on suggestions of paradox and overtones of tragic irony（Allott & Farris 176）という指摘があることや、ローマ教皇庁の検邪聖省から “it was ‘paradoxical’ and ‘dealt with

extraordinary circumstances'" (P&G xi) という批判を受けたことも含めて、逆説的性質がウィスキー司祭の、そしてその物語の顕著な特徴である。そしてこの特徴は、司祭が異なる複数の性質を体現していることに起因しており、それは旅行記での司祭の記述から大きく変わった点である。

## 2．類型的聖人物語

旅行記『掟なき道』には、名も知れない司祭達の断片的情報だけでなく、ミゲル・プロ（Miguel Pro）神父という実際の聖人に関する話が紹介されている。旅行記によるとこの人物は、宗教迫害が続く中約1年半に渡って警察の手を逃れながら、多くの信者のために、禁じられているカソリックの儀式を行った。しかし最後には捕まり、グリーンのメキシコ旅行の10年前、1927年に処刑された殉教者である。"Pro was photographed by the official photographer, praying for his enemies by the pitted wall, receiving the *coup de grâce*" とあるように、処刑されたときの様子が写真に撮られ、その写真は、見せしめという政府の意図に反して、信仰の象徴として人々の間に広まった（LR 10)。グリーンも旅行中に、プロ神父の写真と祈りの文句が印刷されたカードが売られているのを目にしている。印刷されていた写真の内訳は、神父となってメキシコに戻ってくる前の神学校での写真、警察の手配書の写真、処刑場で跪いて祈っている写真、同じく処刑時に両腕を伸ばし目を閉じて立っている写真、倒れてとどめの一撃を受けている写真、死体置き場での遺体の写真であり（LR 85)、それらをもとに、典型的な殉教者の半生を物語ることができそうである。更に、処刑時の様子については、"Hail Christ the King" と叫んだという話も旅行記に出てくる（LR 28)。このように、処刑されるときに敵のために祈りを捧げたり、「主キリスト万歳」と叫んだりするプロ神父の話には、彼の聖人的性質が非常に明瞭に表されている。

一方、逆説的に聖人と見なされる小説のウィスキー司祭の最期の様子は、これとは対称的である。処刑を目前に控えたウィスキー司祭が、"He knew now that at the end there was only one thing that counted—to be a saint" (P&G 253) と「理解した」後でも、聖人らしく振る舞うことはできない。処刑時の彼の様子は、恐怖のためか、あるいは恐怖を紛らわせるため前の晩に飲んだブランデーの影響か、脚がいうことをきかず、彼は二人の警官に支えられて処刑場に連れて行かれる。そして銃殺される場面では、"He was trying to say something: what was the phrase they were always supposed to use? That was routine too, but perhaps his mouth was too dry, because

nothing came out except a word that sounded like 'Excuse'" (P&G 260-1) と描かれる。聖人物語的に「主キリスト万歳」という決まり文句を期待すると、アンチクライマックス的な結末である。彼の最期の言葉が何を意味するのかは様々な解釈があろうが、殉教者として典型的な台詞でないことは確かである。あたかも読者が安易にウィスキー司祭を聖人に結びつけるのを避けるかのように、彼の振る舞いはことごとく聖人の典型から外れている。

小説『力と栄光』の中にも、明瞭な聖人的性質を描く話は存在するが、それはウィスキー司祭を直接描写するものではない。小説中、ウィスキー司祭と僅かな接点を持った人々（小説第1部第4章の題で「傍観者達」と言い表される者達）の姿も断片的に挿話として描かれる。その中には、逃亡中のウィスキー司祭を匿ったことのある家族の話がある。そこでは、母親が子供達に子供向けの聖人物語を読んで聞かせている。14歳の少年ルイス（Luis）は、物語の先の展開を予測できるほど同種の類型的な話を幾つも聞かされてきてうんざりしており、また周りの現実とあまりにもかけ離れた聖人達の物語に欺瞞的な虚構性を感じている。少年が今回聞かされている物語をまとめると以下のようになる。主人公であるファン（Juan）は、"from his earliest years was noted for his humility and piety. Other boys might be rough and revengeful; young Juan followed the precept of Our Lord and turned the other cheek" (P&G 25) と、幼い頃から信心深い聖人的な振る舞いをしている。青年となったファンが修行を終え神父となる頃、小説の舞台（そして現実のメキシコ）と同様にカリェス大統領によるカソリック弾圧が始まり、ファンは圧政に屈せず信仰に殉じる決意をする（P&G 55)。隠れて宗教活動を行った彼も、最後には警察に捕まり処刑される。処刑前夜の彼の様子は、"He had not slept at all, but had spent his last night preparing for martyrdom. He was quite calm and happy" と、死を恐れることなく殉教の心構えが完全にできている。そして刑の執行時にも、"Juan . . . began to pray—not for himself, but for his enemies, for the squad of poor innocent Indian soldiers who faced him and even for the Chief of Police himself" と、自分を処刑しようとする敵のために祈り、"Juan, raising both arms above his head, called out in a strong brave voice to the soldiers and the levelled rifles, 'Hail, Christ the King'" と聖人的最期を迎える（P&G 262-3)。まさに、聖人の記号を繋ぎ合わせて作られたような物語であり、全てが一様に、この人物の一つの性質を表している。

ファンの最期の場面での、敵のために祈ること、両腕を上げて「主キリス

ト万歳」と叫ぶ様子は、旅行記に描かれたプロ神父の最期を思い起こさせる。そして、聖人物語を聞いているルイスが、最初から物語最後の処刑場面を正確に言い当てられるように、それらは典型的な殉教者像に基づいている。また、メキシコで売られていたプロ神父の写真カードが、聖人を表すのに余分な場面や（仮にあったとしても）不適切な側面を含まず、典型的な殉教者の物語を構成できるようなもののみを集めていたのと同様に、ファンの物語は、どの場面・エピソードを抜き出しても常に彼の聖人的性質が表れるよう作られている。言うなれば、プロ神父やファンの話は、単一的に表された聖人物語である。

それに対し、小説のウィスキー司祭の場合、異なった性質の複数の神父達の話が集められている点からも分かるように、その物語の一場面・一エピソードのみを取り上げたのでは、小説全体で示される司祭像とは異なったイメージしか得られない。例えば、典型的な聖人描写の対極ともいえる、先の処刑場面を見ただけでは、彼を聖人と結び付けることはできない。しかしながら、ファンの物語に聖人の類型のみを意図的に集めたような虚構性が感じられるのと同様に、最期の言葉として短い決まり文句すら口にすることができないウィスキー司祭の物語も、聖人的性質を表す描写を意図的に排除して作られているように見える。複数の側面を見せる司祭であるが、聖人として表されないという点では単一的である。Kenneth AllottとMiriam Farrisは、ファンの聖人物語の小説内での位置付けについて、“the parody is also intended to throw into relief the uncomfortable truth about a real saint” と述べている（178n）。確かに、実際の聖人は物語に描かれるものほど単純ではないだろう。（実際のプロ神父にも、話で伝えられていない「不愉快な」面があったかもしれない。）だが、描写が一面的な点では、ウィスキー司祭に関しても同様である。また、これはウィスキー司祭が聖人であることを認めた上での指摘であり、彼の聖人性を判定する際には、基準となるのは典型的聖人像であり、むしろウィスキー司祭の方がそのパロディ的反転と言える。聖人物語と正反対に表されるということは、表す方向性は異なれど、表し方としては同じ性質を有していることである。

ただし、ウィスキー司祭に聖人的側面、あるいは敬虔な司祭としての側面が備わっていないわけではない。彼が、宗教迫害がない他州への脱出をあきらめて、罠と分かっていながら、（死にかけている殺人犯からの）懺悔を聴くという司祭の務めを果たすために警察が待ち構えている中へ向かっていく姿には、英雄的な殉教者の側面が認められる。問題は、司祭の行動にも

かかわらず、告解と赦罪が成立せずに終わり、“At the best, it was only one criminal trying to aid the escape of another”（P&G 227）と言い表されてしまう点である。すなわち、欠けているのは、性質・側面ではなく、それを明確に表す表現なのだ。ほとんどの読者は、語り手のこのコメントについて、“This is plainly not so, for the priest has risked his life to save the other's soul”（Pryce-Jones 50）と、実態を表していないと考えるだろう。そして、小説全体を通じてウィスキー司祭の姿を見る読者は、彼が（正統なものとは異なるが）強い信仰を持っていることを認めるはずだ。しかし、この聴罪の失敗にせよ、類型から外れた最期の言葉にせよ、また自分を不良司祭と呼ぶことにせよ、その美徳はふさわしい表現を与えられていない。“The priest . . . has heroic—even saintly—potential”（Kelly 47）という批評に表れているように、司祭の聖人的側面は「潜在的可能性」でしか表されていない。それでは、たとえ逆説的解釈を伴うものでも、司祭を聖人と認める読者の見方は何を根拠としているのか。

## 3．聖人表現

『力と栄光』には、小説の大半を占めるウィスキー司祭を直接描く部分（第2部と第3部）を挟むように、前述の「傍観者達」の挿話が存在する。そして小説の締め括りとして、（第4部に）司祭処刑後のその者達の様子が示される。その中でも最後に位置するのが、ルイスの家族の話である。母親が読み進めてきた聖人物語も、（上記の）ファンの処刑場面に至る。その日行われたウィスキー司祭の処刑と重ね合わせ、ルイスは殉教者が身近なところに実際にいたことに強く心を動かされる。処刑されたウィスキー司祭も聖人になるのかを母親と語り合う場面に、次のようなやりとりがある。

> ‘Did he call “Viva el Cristo Rey”?’ the boy asked.
>
> ‘Yes. He was one of the heroes of the faith.’
>
> ‘And a handkerchief soaked in blood?’ the boy went on. ‘Did anyone do that?’
>
> The mother said ponderously, ‘I have reason to believe . . . Señora Jiminez told me . . . I think if your father will give me a little money, I shall be able to get a relic.’（P&G 264）

殉教者の血を染み込ませたハンカチのような聖遺物も、聖人物語に定番の要

素である。ファンの物語にも登場する（P&G 264）し、また『掟なき道』にもプロ神父が処刑されたときにその血をハンカチに染み込ませた話が出てくる（LR 85)。すなわち、このやりとりは、「主キリスト万歳」という最期の言葉や聖遺物の存在のような聖人の要素をウィスキー司祭に与え、その最期の様子を聖人的なものに置き換えているのである。更に、"He had a funny smell" という幼い妹の言葉にほのめかされる、司祭の酒飲みの要素は、"You must never say that again .... He may be one of the saints" と、母親によって無かったことにされる（P&G 264)。聖人にふさわしくない要素が削除・変更された結果、ルイスにとってのウィスキー司祭は、物語の中に出てくるような典型的な聖人となるはずだ。

小説の最後には、ウィスキー司祭が復活したかのように、新たな司祭がルイスの家を訪れ、そしてルイスがその司祭の手に口づけをすることで、彼が信仰を受け入れたことが示される。Pendletonは、"At the end of the novel, this homily and the main plot unite to produce a reborn priest to carry on the fight. The boy Luis is largely responsible for joining together these narrative modes" と、この結末は類型的聖人物語と小説の主筋が結合した結果だと指摘し、ルイスが両者を結びつける役割を担っていると述べる（100)。この小説がウィスキー司祭を描くものであるとすれば、この結合（言い換えると、ルイスが物語の聖人に司祭を重ね合わせること）により、類型的聖人物語も司祭を表す物語の一部に組み込まれることとなる。これは、ウィスキー司祭の聖人的性質が小説内ではっきりと認められることである。ルイスが、それまで信じていなかった聖人という存在を、そして信仰を受け入れるようになるのは、信仰を持ったまま処刑されたウィスキー司祭が殉教者の実例を示していると考えるためだ。同時に、少年に信仰を与えたという結果が、司祭は無力ではなく、人々に救いをもたらす神父としてふさわしい存在であることの裏付けとなる。すなわち、ウィスキー司祭の直接描写に欠けている、彼の聖人的側面を表す表現が、「傍観者」による間接的描写というべき形で、ウィスキー司祭を描く物語の中に登場するのである。

聖人らしい側面が表されていないという点で単一的であった司祭は、このことで不良司祭でもあり聖人でもあるという矛盾をはらんだ複合性を持つ存在となる。だが、この結合がもたらす矛盾はこれだけではない。ルイスを通じて示される聖人の表現は、ファンの物語の例のように、聖人の類型を単一的に表す類のものであり、それが一方では司祭の複合性を表す役割を担うというような、語りの上での矛盾する二面性も作り出している。また、ウィス

キー司祭を聖人と見るルイスの認識は、（はっきり表されなくとも読者が読み取る）司祭の一側面を確かに反映してはいるが、全く関連のない物語の聖人と司祭を同一視したものであり、対象の実態を捉えていない。言うなれば、誤った認識で正しい評価が行われている。従って、その認識に基づいた聖人表現は、正しいと同時に誤っていることとなる。小説を特徴付ける、矛盾、逆説、アイロニーは、ウィスキー司祭が複合的人物であることに加えて、実態と表現が一致しないことからも生じていることが分かる。

しかしながら、そもそも聖人というのは、ウィスキー司祭を表す概念として適当ではない。彼が不良司祭的性質を併せ持つからというだけでなく、彼の美徳である篤い信仰は独特な思考に基づいており、プロ神父の話やファンの物語のように、一般的なイメージと結び付いている聖人という概念に適合しないためである。典型的聖人像を規範として司祭の言動を評価すると、そこからの逸脱が浮き彫りとなり、そのことが不良司祭という評価に繋がる。例えば、ウィスキー司祭は、姦淫の罪を犯したことを認めながら、その罪を悔い改めることができない。“He couldn't say to himself that he wished his sin had never existed, because the sin seemed to him now so unimportant and he loved the fruit of it”（P&G 152）と、自分の罪の結果である私生児の娘を愛しているからだ。処刑前夜に彼が神に祈るのは、典型的聖人の例のように敵をも含めた万人の救済ではなく、娘の救済のみである（P&G 250）。司祭自身、このような個人的な考えは、教会の教義から外れており、教会を代表する司祭にふさわしくないと自覚している。だが一方で、人には計り知れない神の意思や慈愛を人間の定めた枠組みで表すことはできないとも考え、“suddenly we discover that our sins have so much beauty”（P&G 155）ということがあると述べる。当然ながら、この特殊な信仰、独特な罪の概念は、万人に受け入れられるものではなく、物語中でも形式主義的な「信心深い」信者から、あらためて不良司祭の評価を与えられる（P&G 156）。繰り返しとなるが、この評価がウィスキー司祭に信仰の美徳が備わっていないことを示しているわけではない。むしろ示しているのは、不良司祭という言葉も、聖人という言葉と同じ基準によって適用されるものであり、その基準自体が司祭を表すのに不適当であるということである。

ウィスキー司祭が娘に対して抱く、司祭としてふさわしくない個人的な愛情について、多くの小説読者は、“It is the quintessential irony that only through his sin does the priest reach anything like the selflessness and devotion he feels to be required of the saint”（Allott & Farris 189）という、

逆説的解釈を受け入れるだろう。逆に言えば、聖人という定型的概念を用いると、逆説やアイロニーの働きなしに、ウィスキー司祭の独自性を言い表すことができないのである。そして、先に紹介したように、「不良司祭的な側面に聖人的側面が表れる」、あるいは「聖人になれないと考える美徳ゆえに聖人となる」というような逆説が、司祭の人物像や小説の性質を語る上で特徴的に現れることから考えると、聖人や不良司祭という一般的な概念が用いられるのは避けられないのであろう。対象を的確に直接表す表現が存在しない、あるいは表現を見つけられないという状況は、司祭が上記の「信心深い」信者に、より本質的な（と司祭が考える）信仰を説こうとする場面を思い出させる。ウィスキー司祭は適当な言葉を探し求めるのだが、"But the right words never came to him"（P&G 157）と失敗に終わる。このエピソードや、司祭が最期の言葉として聖人的定型句も、独自の思考を表す言葉も発することができないことが象徴的に示しているように、この小説には、ふさわしい表現が存在しない状況を描き出す側面がある。そして、存在しない的確な表現の代わりとして、不適当な表現で対象が表されることで、ルイスによるウィスキー司祭と典型的聖人との結び付けに見られるように、矛盾や逆説的状況が生じる。これが、小説が描くもう一つの状況である。

## 4．映画における司祭の表現

*The Internet Movie Database*によると、『力と栄光』はこれまでに三度映像化されている。その中の一つ、ジョン・フォード（John Ford）監督による1947年制作の映画版を、グリーンは全集版の序文で次のように評している。"A pious film which I have never seen was made by John Ford who gave all the integrity to the priest and the corruption to the lieutenant (he was even made the father of the priest's child)"（x）。この映画版のタイトルは『逃亡者』（*The Fugitive*）であり、主要人物の司祭は酒飲みでなくなり、単に司祭と呼ばれる存在（役名表記では「逃亡者」）となっている。これでは、もはやウィスキー司祭の物語とは言えないが、映画冒頭のクレジット・タイトルでこの小説が原作であると（正確には、小説のアメリカ出版版のタイトル「『迷路のような道』（*The Labyrinthine Ways*）を原作とする」と）明記されている。事実、カソリック信仰が禁止されている土地で、警察から逃れながら宗教活動を行った司祭が、最後に捕まり処刑されるという基本的な筋は小説と同じである。また、幾つかの共通する状況やエピソード、例えば、司祭が船で他州へ脱出しようとするが果たせない話、警察による人質作戦と

司祭が自ら人質となることを申し出るエピソード、ミサのためにワインを手に入れようとするエピソード、司祭が酒の所持で逮捕され留置所に入れられる状況、隣州に逃れて体力を回復する話、裏切り者の混血児の存在と彼によって警察に売り渡されるエピソード、は映画にも登場する。このように、個別の状況やエピソードを照合すると、現実のメキシコ旅行でグリーンが見聞したものが『力と栄光』のもとになっている、というのと同程度には、小説はこの映画のもととなっていることが確認できる。そして、小説全体を通して描かれるウィスキー司祭が、旅行記に出てくる「ウィスキー司祭」とは大きく異なっているのと同様に、映画は小説とは異なった物語を提示している。

小説とこの映画との間の大きな相違の一つは、上記のグリーンの短評にもあるように、司祭が全く廉潔で聖人的な人物となっている点である。映画冒頭、担当教区の荒廃した教会にやって来た司祭が、長期の神父不在の間に生まれた多くの子供達に洗礼を施す。これは、小説と旅行記に登場する集団洗礼のエピソードを思い出させる。しかしそれら二つのものと異なり、映画の司祭は無償で儀式を執り行い、映画で語られる物語の性質をはっきりと示す。映画の司祭は、飲酒癖もなく、私生児もおらず、教会の義務をおろそかにする描写もなく、全く善良で敬虔な人物として描かれる。単に不良司祭的側面がないというだけでなく、単一的な人物であるという点でも、複合的で矛盾を抱えた小説のウィスキー司祭とは大きく異なる。象徴的なのは処刑前夜の場面である。小説と同様に、恐怖を和らげる助けとなるよう警部補が司祭にブランデーを差し入れようとするが、映画の司祭はこれを断り、“I'm beginning not to be afraid” と（見たところ本心から）述べる。処刑場に連れて行かれる場面でも、ウィスキー司祭のように警官に支えられることもなく、背筋を伸ばしてしっかりとした足どりで歩いていく。その様子を表すには、むしろ小説内のファンの聖人物語の描写がふさわしいだろう。銃殺場面は別の場所で銃声のみが聞こえる演出となっているためはっきりと描かれないが、「主キリスト万歳」と言ったのかと尋ねられれば、ルイスの信心深い母親でなくてもためらわずに肯定するだろうほど、典型的な殉教者の姿を示している。映画の司祭を聖人と見なすことには、矛盾も逆説もない。旅行記の「ウィスキー司祭」（および実在した他の神父達）をもとに、小説のウィスキー司祭が作られた際に与えられた特質が、映画の司祭が類型的聖人として描かれるとき、失われてしまっているのである。

その映画の司祭が、唐突にウィスキー司祭に倣って、“I haven't been a good priest” と告白する場面がある。相手の女性が、“I don't understand,

father" と応じるが、これは映画を見ている者の思いでもある。すなわち、司祭の「良くない」側面や痕跡が劇中に見当たらないため、彼が何のことを言っているのか、なぜそのようなことを言うのか分からない。だが、続けて司祭が、"I'm afraid I don't understand myself" と言うのを聞けば、上記の台詞はメタメッセージとしての意味合いを帯びてくる。つまり、「良くない」というのは、司祭自身による自己評価の言葉ではなく、小説のウィスキー司祭と同じく映画の司祭にも不良司祭的側面があると、すなわち映画が小説と関連があると、視聴者に伝えるためのものと考えられる。

このように前後との整合性もなく発せられる、実態と一致しない言葉は別の場面にも見られる。小説同様に、映画の司祭も信仰が禁止された土地に留まった理由を、"It was only pride" と述べる。だが、その後に続くものは異なる。小説のウィスキー司祭の場合、他の神父ができないことを自分が行っていることに慢心し、"I got careless about my duties. I began to drink. . . . I gave up fasting, daily Mass. I neglected my prayers—and one day because I was drunk and lonely . . . I got a child" と、傲慢さに起因する不良行為の具体例を列挙する（P&G 235-6）。それに対して映画の司祭は、"I began to lose grace. I began to have pride" と、傲慢であったという同じ内容をただ表層的に繰り返すだけである。確かに、キリスト教では傲慢は大罪とされているが、映画の司祭は言葉の裏付けとなる不良行為を伴っておらず、その他の場面・エピソードで描かれている人物像とも適合しないため、物語の文脈ではこの言葉は全く意味や重要性を持っていない。従って、この傲慢さへの言及についても、ウィスキー司祭との表面的な共通性を示すために、映画の司祭を表すのにふさわしくないにもかかわらず、言葉のみが小説から引用されているとしか考えられない。

全体として、この映画は小説『力と栄光』を表すものとして不適当である。矛盾する複数の側面を持つ司祭という人物像や、逆説的な読みを引き出す物語の表し方が再現されていないからである。しかし、司祭に実態と一致しない表現が当てはめられるところには、小説との共通点を見出すことができる。そして、不適当な表現によって表されるというのが、小説に描かれている現象だと考えれば、小説の物語が映画で不適当に表されているのは、逆説的にこの小説にふさわしいことだと言える。映画を単独の作品として小説と比較すると、明らかな相違点にのみ注意が向くが、映画は小説との関連性が意識されるべき位置にある（すなわち、小説のアダプテーションである）という観点から見ると、司祭の表現として典型的聖人像が適用されることで、

実態と表現の不一致という小説内で提示される問題が、小説と映画の関係で再現されていることに気が付く。聖人的な司祭による「良くない」という告白は、小説とは異なる存在が小説と同様であることを示そうとするものであり、映画と小説との繋がりを確認するものである。それはまた、映画が原作の小説とは別物であると同時に全く無関係でもないという、乖離と接近の二重性を象徴する言葉でもある。『逃亡者』という映画にとってグリーンの小説は、忠実に従ってはいないが無視することもできない規範というべき存在である。この関係は、小説中のウィスキー司祭とあるものとの関係を、奇妙にも映し出している。

## 5．型と個体性

現実のメキシコの人物や事物が『力と栄光』に登場するもののもとになっているとはいえ、語り手や登場人物がその繋がりに言及するような記述は小説中に見当たらず、関連性は必ずしも意識されるべきものとはなっていない。従って、現実をそのまま描くわけでない虚構としての小説と現実（そして旅行記）との関係は、映画と小説との関係のように二重性を伴うものではない。小説中、ウィスキー司祭が絶えず意識するのは、むしろ教会との繋がりである。司祭が常に抱いている「ふさわしくない」という考えは、教会を代表して信仰の範を示すのに自分は適当でないということであり、規範となる型から逸脱しているという意識である。つまり、彼が表す（べき）対象とされているのは、旅行記に紹介される実在の神父達ではなく、聖職者の（あるいは聖人の）型である。そして、型どおりでない司祭は、その不適当な表現ということになる。ウィスキー司祭がどのように表されるかだけでなく、司祭が何を表すかという部分まで視野に入れると、ルイスが司祭を典型的聖人として見ることは、司祭の個体性を見過ごして、彼が本来表すべき信仰の型を見ていることであると分かる。小説で示される表現と実態との不一致は、一般性を持った型と特異な個体との不一致と言い換えることができる。

ウィスキー司祭の特異性を表すために聖人や不良司祭という定型概念が用いられ、また型から逸脱した彼の信仰は、聖人と同一視するルイスの認識により、個体性を覆い隠した型が当てはめられることでその存在が示される。このような、表現伝達の過程における型の重要性については、ウィスキー司祭自身承知している。彼は自分を捕らえた警部補との対話の中で、“it doesn't matter so much my being a coward—and all the rest. I can put God into a man's mouth just the same—and I can give him God's pardon.

It wouldn't make any difference to that if every priest in the Church was like me" と述べる (P&G 234)。宗教や教会という制度が存在し、それを代表する神父という立場にあり、定められた形式の儀式を執り行うことができるならば、個人的性質に影響されることなく、型としての信仰を人々に示すことや与えることが可能であるということだ。しかしながら、ルイスが類型的物語を現実にはあり得ない作り事と退けていたように、単一の性質を表すために抽象化された型のみでは効果を発揮できない。性質の実在性を印象付けることのできる存在が、たとえその個体性が正しく認識されなくとも、必要とされる。型と個体とのこの相互関係は、原作とアダプテーションの関係に類似している。

この小説をもとにした映画『逃亡者』は、型どおりの聖人を描いている点では、単一の性質を示している。実際この映画は、最初から典型的な物語を指向している。小説が具体的な場所と時代を舞台としているのに対して、映画では冒頭に、"The following photoplay is timeless. . . . It is also a very old story that was first told in the Bible. It is timeless and typical and still being played in many parts of the world" と述べられ、時代も場所も限定されない「典型的な」迫害と殉教の物語と位置付けられる。そのような物語としては、特に語るべき要素がないのはまさに型どおりだからだろう。だが、類型的人物像とも物語の性質とも一致しない「良くない」という告白は、型から外れた個体性を垣間見せる。それはまた、この映画が小説との関連性の中で存在することも示している。つまり、この映画で物語的に注目すべき要素は、それが小説のアダプテーションであるという関係から発生している。そして、原作小説が映画にとっての従うべき型であるとすれば、映画が（どちらかといえば平凡で退屈な）典型的殉教物語となっていることは、むしろ型を離れた独自性の表れであると言える。

小説のウィスキー司祭が単純な聖人でも不良司祭でもない矛盾を抱えた存在である特異性が、あるいは典型的信仰の型から外れた彼の特異な信仰が、読者の関心を集めるところである一方で、そのような特異性を言い表すために聖人／不良司祭という型が適用される。言い換えると、個体としての存在意義を示すために型から離れなければならないが、存在が認識されるためには型に依存しなければならない。ウィスキー司祭は、この二方向への動きを巧みに表している。それは、彼の自己認識を含む直接的な描写と、司祭の一側面しか見ていない他者からの間接的な描写と、そして小説全体を通じて見た読者がそれらの描写が必ずしも適当ではないと考えることによる。司祭の

表現におけるこのような二重性は、原作のアダプテーションとの関係に通じるところがある。ジョン・フォードの映画版は、典型的な殉教者の話となりながらも、必然的に二重性の断片を内包することとなったのである。

## 略記

本文中、( ) 内の出典表記に以下の略記を用いた。

LR: *The Lawless Roads*

P&G: *The Power and the Glory*

## 引用文献・フィルム

Allott, Kenneth, and Miriam Farris. *The Art of Graham Greene*. Reissued. New York: Russell & Russell, 1963.

Greene, Graham. *The Lawless Roads* (The Collected Edition). London: William Heinemann & The Bodley Head, 1978.

---. *The Power and the Glory* (The Collected Edition). London: William Heinemann & The Bodley Head, 1971.

Kelly, Richard. *Graham Greene*. New York: Frederick Ungar, 1984.

Miller, R. H. *Understanding Graham Greene*. Columbia: U of South Carolina P, 1990.

Pendleton, Robert. *Graham Greene's Conradian Masterplot: the Arabesque of Influence*. Basingstoke: Macmillan, 1996.

Pryce-Jones, David. *Graham Greene*. Edinburgh: Oliver and Boyd, 1966.

Roston, Murray. *Graham Greene's Narrative Strategies: a Study of the Major Novels*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006.

『逃亡者』(*The Fugitive*). Dir. John Ford. Perf. Henry Fonda. RKO, 1947. ビデオ. 東北新社.